

## 報 告

## 第 49 回日本リハビリテーション医学会学術集会

横浜市立脳血管医療センター 理学療法士 杉本 俊太郎

## 1. はじめに

2012 年 5 月 31 日～6 月 2 日に福岡国際会議場・福岡サンパレスで開催された第 49 回日本リハ医学会に参加させていただきました。リハ医学会というと日本のリハビリテーションの最高峰の学会という印象があり、理学療法士免許を取得して 2 年目の自分が参加して果たしてどれだけのものが得られるのか、という不安がありました。しかし、振り返ってみると、参加したことで自分自身の知識と技術の習得に対するモチベーションは大きく高まり、やはり参加してよかったと感じています。

日本リハ医学会設立 50 周年となる本学会のテーマは「社会参加・職場復帰を目指して」でした。743 題の一般演題が採択され、これは例年を上回る採択数とのことでした。一般演題・特別講演・教育講演・シンポジウム・ポスター発表が 9 つの会場に分かれて同時に進行されることに加え、ランチョンセミナー・企業ブース・50 周年記念事業といった企画も用意されていたため、事前に聴講する講演を絞っていきましたが、実際に参加してみると他にも興味深い発表が多くあり、何を聴こうか悩みながら会場内を動き回る 3 日間でした。

## 2. 発表・講演

私は脳血管障害の専門病院に勤務しているため、脳卒中患者に接する機会が多くあります。今回、私は脳卒中に関する発表と本学会のテーマである社会参加・職場復帰に関する内容の発表を中心に聴講しました。日本リハ医学会というと、脳卒中後の痙縮や四肢の切断後の治療といった機能障害に対

する治療についての発表が中心という印象がありましたが、実際には就労・支援や地域連携等の発表が多く企画されていました。

会場では質疑応答が活発にされており、発表の内容を理解し自らの診療に生かそうとするリハ医の熱意と向上心を感じました。

印象に残った発表のひとつに、高次脳機能障害を負った患者が職場復帰を実現したというものがありました。外来リハを継続しながら約 3 年をかけて医療スタッフと企業が連携し配置転換・就業時間の調整等を行った結果、職場復帰が可能となったという内容でした。各病院や地域により患者層は異なるため、どの病院でも一概に同様の介入を行うことができるとは限りませんが、機能障害の改善だけに目を向けるのではなく、機能障害を負ったことを理解し、患者の社会参加のために病院・企業・地域が連携し介入するというのがリハビリテーションには必要なのだと感じました。

私は、診療に際し「機能障害の改善」にばかり目を向けてしまうことがよくあります。しかし本学会での発表を聴講し、機能障害の改善のみが患者の社会参加を実現するのではない、ということを改めて感じることができました。もちろん機能障害を改善することはリハビリテーションの重要な要素だと思います。おそらくは患者もまず第一に望んでいることであり、コメディカルとして機能回復に最善を尽くすことは職務であると思います。しかし残念ながら機能障害が残存してしまった場合に、機能障害とどのように向き合い、必要な支援や介入を行っていくかを考え実行していくこともコメディカルとして必要なことだと感じました。

リハビリテーションの語源は re (再び) - habilis (適した) - ation (すること) だそうです。本学会に参加し、この言葉の意味を改めて考えるこ

横浜市立脳血管医療センター

〒 235-0012 神奈川県横浜市磯子区滝頭 1-2-1

とができました。

### 3. 企業展示

企業展示ブースでは、車いす・装具といった馴染みのあるものから、ロボット等の最新のリハビリテーション機器をみることができました。どの機器も人体工学が駆使して開発されていることが伝わってくるものばかりでしたが、特に印象に残ったものは歩行支援ロボットでした。

歩行支援ロボットは、下肢の筋肉への微弱な電気信号をセンサーが感知し、内蔵コンピュータがその電気信号を解析し、その信号に応じて、筋肉の動きより一瞬早くパワーユニットを動かし、ロボットの制御により安定したパワーアシストをするというものでした。これにより、坐位での膝の曲げ伸ばし、立ち上がり、歩行、階段等、正確な下肢の屈伸と筋力を必要とする動作に対するアシストを行うことができるそうです。これまでロボットを直接目にする機会はありませんでしたが、実際に見てみるとその動きはとてもスムーズであり、このロボットを導入することで歩行が可能となった患者がいるということも納得できるものでした。今後、さらに研究や開発が進んでいき、より安価で高品質のロボットがリハビリテーションの世界でも活躍していくことが想像できました。ロボットの導入というと人間味のないもののような印象を受けますが、これからリハビリテーションの受容はさらに増えていくことが予想されます。ロボットを導入することで人間の手だけでは足りない部分を補い、質の高いリハビリテーションを受ける人のすそ野が広がってほしいと思いました。

### 4. 50周年記念事業

特別企画として、「九州におけるリハビリテーションの歩み」が紹介されていました。2部構成になっており、第1部では、九州地方会の設立や発展に貢献された先生方の足跡がパネルで紹介されていました。

日本のリハビリテーション医学の黎明期からご活躍された先生方の功績を拝見しながら、まだ日本にリハビリテーションという概念が根付いていない頃から、リハビリテーションの発展のために努力されてきた先生方の志を感じることができ胸が熱くなりました。

第2部では、九州から全国に発信されたリハビリテーション機器や技術の紹介がされていました。展示場には、九州ならではの温熱療法や義肢・装具等のパネルでの紹介と共に黎明期に開発されたであろう電動義手や長下肢装具等が展示されていました。現在よりも研究も開発技術も進んでいなかった頃に、現在に通じるリハビリテーション機器の土台を築きあげられた先生方の創意工夫には頭が下がる思いでした。

記念事業を見学して、リハビリテーションの歴史を知ることができるのと同時に、自分は今、先達の築き上げてきた土台の上に立っているのだということを感じることができました。技術や研究は日々発展していきます。私もその発展に置いて行かれないように、またその発展にわずかながらでも貢献できるようコミディカルとして勉強に励もうと思いました。

### 5. おわりに

今回、日本リハ医学会にて様々な発表や企画に参加することで多くの知識を吸収することができました。またリハビリテーション医学の先達や現役のリハ医の方々の熱意に触れることができ、コミディカルとしての自分のモチベーションの向上につながりました。現在、自分が当たり前のように利用している機器や技術も、先人達の努力の上に成り立っているのだということを強く感じました。私達はそれを受け継ぎ、よりよいものに発展させていかなければならないと思います。

来年の第50回学会は東京で開催されるそうです。今年発表された研究が来年にはどれほど発展しているのか。私自身も自己研鑽に励み、またぜひ発表を聴く機会があればと思っています。